R8.9.11開催

令和8年度　第1回文化創造ギャザリング　議事概要

＜奈良県立美術館の整備場所と整備方法について＞

結論：設置場所は奈良春日野国際フォーラム甍とし、整備方法はB案が望ましい。

■施設整備の方針

・収蔵庫は美術館活動にとって非常に重要で、いずれ満杯になる。将来を見据えた形での収蔵庫を検討すべき。

・A案は、別館から本館への作品移動時の安全性が課題。一方、本館に収蔵庫棟を増築するB案は、効率的かつ安全な作品移動が可能になる。

・美術館で働く職員が働きやすい施設であることが大切。職員の意見を聞きながら、使い勝手や動線をきちんと検討すべき。

・周辺には活断層があり、地震が起きる可能性を考えれば、収蔵品を守るために免震建築が必要。

・美術館には「美・知・憩い」が必要。憩いの場になるレストランやカフェはぜひ考えてほしいが、厨房で火を使うことについては注意が必要。展示室や収蔵設備と連動した建物では、火気使用に制限が出る場合がある。

・甍の建築そのものが非常に魅力的なので、その辺も踏まえて増改築は慎重に考える必要がある。

・収蔵庫棟を正面側に増築するのであれば、単なるバックヤードではなく、来館者を迎える新しい美術館の「顔」になる。意匠を非常に重視し、今後の美術館の顔になる建築として考える必要がある。

・地下に電気室や機械室がある場合、浸水すると空調等の施設全体が止まる可能性がある。土砂災害だけでなく、水の侵入等も含めてしっかり対策すべき。

■見せる収蔵庫

・「見せる収蔵庫」を設置する場合、作品が見えるよう作品同士の間隔を空けるなどの対応により、通常の収蔵庫に比べ、収蔵効率が低下する場合もある。

・収蔵資料を広く公開するという点では、コレクション展示を充実させるという方法も考えられる。

・見せる収蔵庫は、収蔵スペースの問題だけでなく、案内スタッフの配置など、運営面の負担が大きいという問題もあり、慎重に検討していく必要がある。

・収蔵庫や展示室等美術館の根幹となる機能を満たすことが最重要。収蔵庫の中に展示室的な部分を作ることは運営面での負担が大きい。そのため、収蔵庫ツアーといった別の方法で教育普及に繋げるのがよいのではないか。

・収蔵資料へのアクセスについては、高精細のデジタル画像で作品を検索・閲覧できるようにし、実物を見る必要がある場合に特別に公開するという方法も考えられる。

・収蔵庫が県民に開かれておらず、何を収蔵しているのか分からないことが、収蔵資料廃棄の議論につながってしまう面もある。どうすれば県民にコレクションを開くことができるのか、「見せる収蔵庫」の設置について、一度きちんと検討した上で判断すべき。

■能楽ホール

・これからの美術館は、収集したものを展示するだけでなく、現在進行形で動く美術、創作やパフォーマンスも含めた、コンテンポラリーアートの場であることを考えると、発表の場として、能楽ホールも美術館と一体的に運用できると良いのではないか。

・能舞台は神聖な場所とみなされるため、運用面の制約があるものの、舞台の上に何か敷物を敷くことによって、パフォーマンスアートが可能になるのではないかと考えている。そういったソフトの部分で

の検討に期待している。

・美術館で収蔵されている能面・能装束の展示と能舞台との連動は有機的で良いものになるのではないか。

■アクセス、奈良公園との連携

・駅からの距離を弱点にせず、県庁前やバスターミナル周辺等をアートのサブセンターのように演出するなど、まちづくりと連動した工夫により、歩く人が増えるのではないか。

・途中で一服できる場所、少し時間を過ごせる場所があるとよい。

・甍は建築や庭園に大きな魅力があり、貸切イベントに活用できる可能性がある。貸切できるスペース、VIPへの飲食提供やバックヤードの設置、大きな電源容量等を設計段階から考えておくと良い。

・奈良の観光では宿泊してもらうことが重要で、「奈良の夜」を体験できる施設になるとよい。夜間の照明やプロジェクションマッピング等に対応できる電源容量やミスト設備のような暑熱対策も必要。

（山下知事）

・「見せる収蔵庫」は面白いと思うが、現在の美術館収蔵庫を見ると作品が密に収納されている。見せるために余白を取ると、収納できる作品数が減るのではないかという心配がある。

・大きな瓦屋根が広がる素晴らしい甍の景観が、収蔵庫棟の設置で損なわれないかと懸念したが、手前に低い瓦屋根、その奥に大きな既存建物があるような連続した景観にできるのなら良い。東側の庭園も非常に素晴らしいので、カフェを営業し庭園にも席を設け、抹茶や和菓子など日本の食文化も楽しんでもらえる場所にしてはどうか。別館についてはテラス席のあるカフェレストランにすることも考えられる。甍周辺には、景色を楽しみながら腰を落ち着けて休める場所が少ないので、そうした機能も必要。

・能楽ホールは最大限活用したい。現在は貸館的な利用が中心だが、自主事業として能を企画・上演することも考えられる。美術館の運営主体が能楽ホールも一体的に運営してはどうか。例えば「奈良県立美術芸能館」のように、美術だけでなく芸能も扱う施設であることが伝わる名称にする考えもある。

＜整備基本計画の策定に向けた事業活動の方向性について＞

・事業活動の方向性については賛成。

・県民の方が来られる施設にするためには、奈良県立美術館を訪れたことのある奈良県民の割合を把握すべき。

・デジタルアーカイブ、デジタルミュージアムはぜひ重視すべき。収蔵資料をオープンにすることが今後の運営基盤になるので、デジタル化は必須である。

・美術館は、文化資源に関するデータが集まる場所であり、そのデータを活用できるよう、「AI事業者との連携」を入れておくべき。

＜新たな美術館の運営手法について＞

・運営手法については慎重に考える必要がある。PFI、コンセッション等は、方法論として検討すべきだが、美術館を運営できる事業者は非常に限られており、事業者が見つからないケースもある。

・現実的には県直営か、県が主体となって何らかの法人をつくるかということになるのではないか。地方独立行政法人にするのであれば、県内の文化施設等との一体的な運営を考える必要がある。

・学芸業務は継続性が非常に重要。作品の保存・研究・活用・教育普及は公共が責任を持って担うべき。

・今回示された事業活動を実施するには、かなりの予算と人員が必要。施設だけ整備して終わりにせず、その後の活動に必要な予算と人をしっかり確保すべき。

・美術館を独立採算で運営するという発想は難しい。むしろ「ミュージアム・ベーシックインカム」のように、景気や来館者数に左右されず基本的な活動を続けられる財源を確保して、入館料や事業で得た収益はコレクションの拡充等、次の美術館活動につなげていくべき。

・二重価格を検討するなら、インバウンド等を高くするのではなく、県民や子どもを安くするという発想で考えるべき。美術館は収入を得るためだけの施設ではなく、地域への還元を考えるべき。

・奈良公園という世界的に認知された場所と文化施設を結び付けることで、グローバル企業の予算を活用した事業等につながる可能性もある。

・アイデアや運営能力を持つクリエーターに参画の機会が届くような形で運営していく必要がある。公共性や設置者としての責任は県が持ちつつ、幅広く民間とも知恵を出し合う形が望ましい。

（山下知事）

・PFIのBTO方式では、建設企業や運営事業者などがコンソーシアムを組んで応募するのが一般的であるが、建設企業などが本当に美術館にふさわしい運営事業者を選べるのかという問題がある。美術館の運営は、他の施設運営とは少し性格が違うので、慎重に考える必要がある。

・県立美術館では外国人観光客を無料としてきたが、制度を見直し、現在は、小・中・高生及び18歳未満の方は無料、65歳以上の方は企画展のみ平日無料としている。入館料収入は美術館全体の運営費から見ればそれほど大きくない。わずかな入館料収入を得るより、無料にして来館者を増やすという選択もあり得る。

以上